再度、やはり俺は本物を求める

火南 蛍

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

三年へと上がった比企谷。そんなある時、一色から生徒会の手伝いを頼まれる。そしてだんだん変わりゆく俺の日常――俺は、また本物を求めてもいいのだろうか？

※Ｒ―１５は一応のための保険です。

※原作後を自分なりに考えて終わらせた後のストーリーです。

目次

やはり一色いろはは悪魔である ―― 1
かくして俺は彼女を助ける ―― 4
俺と一色とラーメン ―― 8
一色いろはは悩める乙女である ―― 12
俺に逃げ場は存在しなかった ―― 14
俺は、なぜだか彼女が気になる ―― 18
一色いろはは自由気ままである ―― 21
名前の知らない彼女はアイツに似ている ―― 24
嫉妬する彼女は謎である ―― 29
デートという名の召使い ―― 32
彼女の名前は今も俺の心の中に存在する ―― 36
俺と雪風の後ろには、彼女がいる。 ―― 39
エリートぼっちの連絡先交換 ―― 43
戸塚彩加は天使である ―― 46
材木座という男は常にやかましい ―― 49

やはり一色いろはは悪魔である

現在、俺はベストプレイスにいる。
もう言わずともわかるだろう。特別棟の一階。保健室横、購買の斜め後ろ。
冬はかなり肌寒くなるが、今は桜が舞い散る春の日。
先週に入学式、始業式が行われたばかりだ。
三年になった俺は、今も昔も変わらずボッチメシを続けている。
「せーんぱいっ」
購買で購入したパンを食べていると、ふと後ろから女子特有のあざとい声が聞こえてくると同時に、肩を叩かれた。
「……あぁ、一色か」
「む～、全然驚いてなさそうですね」
「別に……お前何回も同じことするし。もう慣れた」
「もう慣れたって……はっ!?もしかしてそれ以上のことを望んでましたか少し気持ち悪いですごめんなさいもう少し関係が良くならないと無理です」
「ちげーよ、俺はお前に何回振られればいいんだよ」
ふふふ、と相槌を打つように笑う彼女は一色いろは。俺が三年に上がってなお、絡みのある数少ない知人だ。
隣にちょこんと座り込む拍子に、一色の亜麻色のセミロングが揺れた。
ふわっとした髪とくっとりとした大きな瞳は小動物めいていて可愛らしいが、内面は自称天然の「女子高生」の皮をかぶった悪魔だ。
膝よりもやや上のスカート丈にナチュナルさを意識した薄いメイク、袖を少し余らせたクリーム色のカーディガン、襟元のリボンは鎖骨が除くか覗かないか程度にゆるく締められ、全てにおいて自分の可愛さを惹き立てさせている。計画的に自分を見せているような輩ほど、たちの悪いものはない。
「で、今日は何の用だ？」
「ぶー、用事が無かったら来ちゃダメ何ですかー？」

「別にダメってことはないが、ほら、お前も色んな噂されそうだからな。そういうのは避けた方がいいだろ。俺って、まあなんだ……悪目立ちしてそうだし」
「……」
「どうしたんだよ、そんな改まった顔して」
「い、いえ……その、何でもないです」
「そうか」
彼女は顔を俯けたかと思うと、手に持っていた弁当箱を開け始めた。
中に入っていた卵焼きを咀嚼し、ふと何か思い出したかのように話を始めた。
「あ、そういえば忘れてました。先輩って最近暇ですか～？」
「あぁ、予備校がある日以外は大抵暇ちゃ暇だな」
「それならよかったですっ」
「何が……」
嫌な予感がする……
一色が俺の顔を伺って笑顔でいる時など、大抵いつも決まっている。
つまりはそういう事だろう。
「もうすぐカナダの学校から体験入学来るんですけど、その時に開くサヨナラパーティーと生徒総会について色々と手伝って下さいっ」
「やっぱり用があったんじゃないか……」
「いいじゃないですか～先輩暇なんですし～」
全くこいつは……まあでも、生徒会の手伝いを小町（とついでに川崎の弟）もしているらしいし、世話になってる礼として手伝うか……
それに、副会長と三年に上がってクラスが一緒になったせいか、少し親しくしている。あと一年共に過ごすのだから、恩を売って置くのも悪くないだろう。
「わかったよ。ただし、そんな大部分な事を手伝ったりはしないからな」
「はいっ、ありがとうございます！」

かくして、俺は生徒会メンバー含め一色達の仕事を手伝うことになった――――。

かくして俺は彼女を助ける

放課後。
俺は早速、生徒会室へと足を運んだ。
「あ、お兄ちゃん！」
「お兄さん！こんにちはです！」
扉を開けると、生徒会メンバーは忙しそうに仕事をしているのが見える。
小町と大志に軽く、おうとだけ相槌を打って中へ入っていく。
そして、いつものように一色は――
「せーんぱいー、遅いですよー」
仕事にはあまり触れず、呑気に椅子に座っていた。
「遅いってお前な、仕事もせずに何をしてるんだよ」
人に仕事を押し付けておいて自分は楽しようなど片腹痛い。
ここは一つ、先輩として注意しておくべきではないだろうか。
「は？生徒会長としてちゃんとメンバーを監視してるじゃないですか？」
……その、なんて言うかいう気が失せてしまった。というか、発言が想像の斜め上を行き過ぎていて言い返すとも出来ない。
「そ、そうか……まあ一色に限ってはそっちの方がいいかもな」
こいつは指示出しや、周りのヤツらへの気配りについては中々の評価を与えれる。つまるところ、人を扱うのが上手いのだ。
むしろ副会長やその他メンバーからしたら、仕事なんてされたら足でまといにしかならないかもしれない。
さらには私物の冷蔵庫から紅茶を取り出し、カバンの中に入っていたお菓子と共に一人だけ自由気ままに高みの見物をしている。
……やはり声だけでもかけておくか。
「おい一色、少しは手伝ったらどうだ？俺も見てやるから」
「むー仕方ないですねー。ではお昼に言ったサヨナラパーティーの案件に取り組むとしましょう」
「おう。で、そのパーティーで何をするんだ？」

「それが問題なんですよ、何も決まっていなくて。そもそも何でうちに来るんですかね、カナダのえっと……何とかスクール」
「ハンワースセカンリースクールな、それくらい覚えてやれよ」
そう。
うちの総武校では毎年四月になるとカナダにあるハンワースセカンリースクールという珍妙な名前の学校から生徒が体験入学に来るのだ。
この体験入学は年間行事に毎年含まれるほどの大々的なモノであり、その過程もそうだが、最後のサヨナラパーティーが印象付けとして最も大切になる。
「去年のサヨナラパーティーは確か……体育館の舞台を使って色々と演し物をしてたよな」
「はい、さすが城廻先輩って感じでしたよね」
「ああ……」
何なら今年も去年と同じことをしてもいいのだが、去年のめぐり先輩の活躍が大きすぎて二番煎じに思われてしまうので得策ではないだろう。
なんたってあのめぐり先輩だ。みんなの城廻めぐりをしていたあの人に、この一色が敵うはずなどない。
であれば必然的にそれ以外で楽しめるものを考えなければならないのだが……
「これと言っていいものが思いつかないな」
「はい……去年が凄すぎてハードルがどうしても高くなってしまいます……」
「まあそんなスグに決まるものでもないだろう。とりあえず今日は考える時間を与えて、一人につき二つか三つ案を考えて来てもらう。それで後日話し合いをしたらいいんじゃないか？」
「そうですねー」
よし、これで俺の今日の仕事は終了。
小町と一緒に帰って、サイゼでもご飯を食べに行くとするか。
と思っても、この悪魔は全てを見通したかのように言動を遮ってく

る。
「じゃあ先輩！今日はもう帰りましょう！」
「……は？」
「は？ってなんですかー。この美少女が一緒に帰ってあげるって言ってるんですよー」
　思ってた反応と違ったのか、一色は頬を膨らませぷいっと顔をそっぽへ向けた。
「え？美少女？どこにいるんですかね？そもそも俺は小町と帰りたいんだが……」
「こ、こ、に、いるじゃないですかー！」
「はいはい、確かにお前は見た目だけは美少女だな、見た目だけは」
　大事なことなので二回言いました。
「そ、そうですか……っていや！中身も超絶美少女ですよ～」
「まぁお前が美少女かどうかは置いておくとして、何でお前が帰るの。副会長とかむっちゃ忙しそうに仕事してるじゃん」
　これではまるで社会の闇を見ているようだ。
　歳上の先輩や上司から『あれやって』『これやって』と指示されながらも、指示した本人は何もせず他の人達と喋りながらサボっている光景。
　よくあるよね？
　ソースは俺。
　高校に入って暫くたった頃、欲しいゲーム機を買うためにバイトを始めたものの、パシリにされ続け長く続かなかった。
　そう言えばちょっと前にもあったな。あれは確か文化祭の時。パシリ扱いされてたのは今でもよく覚えている。っべー、人ってマジで人だなー、っべー。
「みんながやってるのは主に書類作りやらチェックやらですし、別にいいんじゃないですかね？私帰っても」
「はぁ、まぁ別にお前必要なさそうだしな」
「ぶー、それは結構酷くないですかぁ」
　ふてくされて不満気な顔をするが、そう言われても自業自得なもの

である。
「悪かったって。それじゃあ帰るか。小町～、先行ってるからな～」
あいあいさー、というよく意味の分からない返事を貰った所で俺と一色は生徒会室を後にした。
そのまま昇降口へと、こつんこつんと小さな音を立てながら歩いていく。
……まあ、たまには悪くないな。こういうのも。
あの日、あの時から。
俺は後悔した。いや自分でこうなる道を選んだ。
本物なんて求めずに、偽りを選んでしまった。
それは俺の罪だ。
結果的に一人になる道を選んだ。
それでも、こんな俺を頼りにしてくる一色は、俺の唯一の救いなのかも知れない。
だから俺は彼女が頼ってくる間は、彼女を助けてやろうと。
俺はそう決めた――――。

俺と一色とラーメン

「せーんぱいっ、私はギタギタに挑戦してみようと思います！」
「やめておけ、勇敢と無謀は違うぞ」
俺と一色は学校帰りに晩飯を食べに来ていた。
で、何の会話かって？
それはこれからの会話で分かるだろう。
「いえ！これは決して無謀などではありません」
「なんでそう言いきれるんだよ……」
「だって先輩に出来て私に出来ないこととかないじゃないですかー」
でた。
でたよ、一色の「じゃないですかー」。
相手のことなど何も知らないのに勝手に決めつける一色の奥義だ。
そもそも俺に出来てお前に出来ない事など山ほどあるだろ。
お前ステルスヒッキー発動できるのかよ。
なんて言うと「は？」と冷たい目で見られるのは簡単に予想出来るので言わない。
「まあ、いいんじゃねえの？じゃあ俺は気分的にコッテリにしようかな」
「決まりですねっ。では早速食券を買いましょう」
時間帯的にも来客がピークなはずなのだが、幸運なことにカウンター席が二席空いており、俺たちはスグに券売機で食券を購入した。
一色はとんこつラーメン。俺はしょうゆラーメン。
たまたま気分的に俺はしょうゆラーメンを選んだのだが、一色の方は余程無謀な挑戦をしたいのか、ギタギタにとんこつという上級者向けのラーメンを選んだ。
やっぱり、阻止した方がいいよな……
「ギタギタで！」
うん、普通に無理でした。
一色の分も合わせて言ってやろうと思ったが、席に座ったと同時に先に告げられてしまった。

俺も渋々食券を差し出しながら「コッテリで」と告げる。
ちなみに俺と一色が初めに会話していたことは、『背脂の量』のことだ。
この店は背脂と味の濃さが売りで、他のラーメン屋と比べて味が強い。注文時にも背脂の量を変えてもらえるのがこの店の特徴だ。
もう三度目になる一色とのラーメン屋。
こいつとの初デート(と呼べるのかは分からないが)、あの時食べてからラーメンへの偏見は九十度ほど変わり美味しい食べ物と認識してくれたようで俺も嬉しい。
しばらく一色と雑談(適当に返事をしているだけ)をしていると、出来上がったラーメンが出された。
「いただきます」
冷めないうちに食べなければラーメンというものは美味しくないものだ。すぐさま食事に取り掛かる。……まぁ俺、猫舌だから少し覚まさなきゃいけないんだけどね。
ハフハフと熱さを堪えながらも、咀嚼する。やはり美味しいが、少し物足りなさも感じる。今日は我慢するとしよう。
「せ、せんぱぁい……」
……やっぱり、か。
二口三口目で一色が限界だとばかりに俺に目で訴えてくる。
それもそうだろう。とんこつにギタギタなど、俺の女性知り合いでも平塚先生くらいしか食べれるの知らないぞ。ラーメン食べるような女性知り合いなんて平塚先生しか知らないんですけどね。なんなら女性知り合いが全くいないまである。流石俺。
「ほれ」
俺はたまたま気分的に一色でも食べれる背脂の量がコッテリのしょうゆラーメンを彼女に差し出した。
間接キスになってしまうのが多少アレだが、この際構ってられないだろう。それに、この歳にもなればそういうことにも抵抗が薄れてくるものだ。
「い、いいんですか……?」

「いいもなにも、食べれないなら仕方ないだろ」
「ありがとうございます……ふふっ、これじゃ間接キスになっちゃいますね」
「お前な……ちょっと気にしてたことんだから言い出すなよ……まあこうなることは何となく想定してたし、許容範囲内だがな」
「……」
「……？どうしたんだ？」
「い、いえ、その……何でもないです。……ズルいですよ」
「なんか言ったか？」
「いえ、さあ早く食べちゃいましょ」
「そうだな」
顔を俯け、何かボソッと呟いていた気がする。
つい聞き返してしまったが、普通の対応をされたので本当に何も無かったのだろう。
こいつの声音もいつもと変わらなかったし、何よりご機嫌な様子だ。もはや、いろはす検定三級を取れるまである。
まぁそんなどうでもいいことは頭の片隅に置いておいて、ラーメンを食べるとしよう。
せっかくのギタギタだしな。やっぱり上手い。
一色が口づけしたことを無理にでも忘れて、俺は箸を進めた。
＊＊＊
「先輩、送ってくださってありがとうございます」
「おう、気をつけて帰れよ」
「はいっ、それではまた明日です～」
一色を駅まで送ると、電車の時間の都合でスグに別れの挨拶を交わした。
ちょこちょこと歩きながらも、彼女は途中で振り返り小さく手を振ってくる。そんな愛嬌のある一色を遠く見つめながら、彼女が視界から消えたところで俺も帰路へたった。
ふと思う。
一色いろはは『素敵な何か』を持っている。

それは俺の身近にいた彼女たちも持っているものだ。いや、持っていたというべきだろうか。
それはきっと、一色や俺の身近にいた彼女たちだけではなく、全ての女の子が等しく持っているもののだろう。
その何かとはいったいなんだろうか。
いや、その正体を俺は知っている。
だから、俺は無意識のままに、その何かを遠ざけようとしているのかもしれない。
少しだけ、そんなことを考えた。

一色いろはは悩める乙女である

「はー……」

家の中へと入るとともに、私はスグに自室へ戻り、着替えもせずにベッドへとダイブした。

私、一色いろはは恋心に悩める乙女である。

前までは葉山先輩が好きだった。それは決して間違いない。

それでも、本気で好きだったかと聞かれたら『そうでもない』と答えるしかない。

だって、私にとっての彼氏彼女の関係なんて、自分自身を魅せるためのモノでしかなかったから。

でも、今は違う。先輩と付き合いたいと、好きだと自分から思うし、気がつけば先輩に会いに行ってしまっている。

「私、なーんであんな人好きになっちゃったのかな……」

いつからだろう。

先輩との初デートに行った時？よりは多分前だし。

やっぱりディスティニィーランドに行ったあの時かなぁ……

帰りのモノレール――

『――振った相手のことって気にしますよね？可哀想だって思うじゃないですか。申し訳なく思うのが普通です。……だから、この敗北は布石です。次を有効に進めるための……だから、その……がんばらないと』

私は周りに人が居なければ今にも泣き出しそうだった。

我慢しても嗚咽が漏れ、瞳にはじわりと涙が浮かぶ。

そんな中、先輩は言ったの。

『すごいな、お前』

って。

普通は頑張れって、人事みたいに言うのが普通なのに。先輩はすごいって言ってくれた。

多分、それが私が先輩を好きになったきっかけ。

それから先輩と時間を過ごすにつれて、どんどん好きな所が増えて

……今日のラーメンの時とか、些細なことまで気を使ってくれるし、よく周りを見てるし、歩く時は歩幅を合わせてくれるし。
好きな所なんて言い出したらキリがない。
……ダメダメな所もたくさんあるんだけどね。
でもあの時に言った――
『――責任、とってくださいね』
今思い出すだけでも顔から湯気が出そうになるほど恥ずかしいけど、アレは結構本気で言ってた気がする……
「先輩は私の気持ちに気づいてるのかな……」
あの人、妙に勘が鋭い所あるのに、自分のことになると凄いドン臭くなるからなあ……
多分だけど、いや、間違いなく気づいてるはずがない。
ただ、一つ心配なことがある。
やっぱり、先輩はあの二人に影響されすぎた。
それは、どうしても私の手の届かない所にあって。それでも無邪気に私は追い求めてしまう。
私は――本物が欲しいから。
その本物に、先輩が気づいてくれればいいのだけども。あの人は自分の本物を心のうちに閉ざしていそうで、それは悲しいことに今の私では開くことが出来ない。
「あーあ……なんであんなめんどくさい人好きになっちゃったんだろうな……」
一色いろはは、今日も悩める乙女であった。

俺に逃げ場は存在しなかった

「では皆さん！一人ずつ考えた案を発表してくださいっ」

時刻は放課後。

俺と同じ三学年、自クラスの教室に残って友達と会話する者もいれば、受験に備えてそそくさと帰宅していく者もいる。

まあ後者が圧倒的に多いのだが……それでもまだ部活動に専念する者も少なくはない。

前者の場合は受験をせず、かつ部活動も行っていない者の集まりだ。

ちなみに俺も大学には通うつもりなので、受験生ということになる。……働く気は全くないけど。

それに、俺が狙っているところならそこまで勉強漬けしなくとも、間違いなく合格するだろう。でなければ一色の仕事の手伝いをしたりしないからな。

「では副会長からお願いしますねー」

そして昨日話していた、サヨナラパーティーの件について今現在、生徒会室で会議をしている最中だ。

「ああ、じゃあ……去年の城廻先輩に劣らないようにするためにはどうするか考えたんだけど、やっぱりみんなで楽しめるゲームか、お菓子やジュースなんかを出して本物のパーティーなんかをするのがいいかと思う」

「ありがとうございます、次は書記ちゃんお願いっ」

「はい――」

一通り皆が案を出していく。

書記ちゃんと会計くんの案は副会長と似たり寄ったりなものだ。それに比べバカな小町とポンコツな川崎弟はどうやっても実現不可能な案を出して、他のメンバーから半分諦めの目で見られていた。

「では最後に先輩どうぞー」

「は？」

いやいやいや、何言っちゃってんのコイツ……そもそも俺は生徒会

メンバーじゃない。だから何も考えてきていないのも当然である。
『は？』じゃないですよ。先輩こそ何言っちゃってるんですか～」
「いや、そんなもの考えてきてないんだけど……」
皆からゴミを見る目で視線を向けられる。
そんな目で見ないで！決して案を考えること忘れてたとかじゃないんだからね！
「……はぁ、忘れてたんですね」
「はい……」
「もういいです、話を進めましょう」
一色と副会長を中心にどんなゲームをするかを決めていく。それに、お菓子やジュースなんかについても。
だが、それを考えるにあたって、突き当たる壁がある。
ゲームをすることは構わない。
日本だけで行われる独自のゲームだってある。もちろん、それに拘らなくてもみんなで楽しめるものは幾らでもあるからだ。
だが問題なのは飲食物の買い込みについて。
まず圧倒的に生徒会が使える費用が少ないこと。全校生徒分用意するなど、不可能と言わざるを得ない。
ならここは一つ、俺のフラッシュアイデアを提供するとしよう。
「なあ、ちょっといいか」
「なんですか？」
一色や副会長含め生徒会メンバーが一斉に俺へと顔を向ける。
皆沈黙を続けるあたり、俺もこいつらから大分信用されるようになったのだろう。一色よりも生徒会長やってる自信あるし。
「生徒会が使える具体的な費用なんて、高が知れているだろう。まず全校生徒分菓子やらジュースやら用意するのは無理だ」
「で、でもそれはほら、生徒みんなから少しずつ集金したら集まるんじゃ……」
やっぱり一色ちゃんはおバカなのね……と心で密かに思いながら話を続ける。
「本気でそんなことできると思ってるのか？仮に学校側からの許可が

降りたとしても、必ず反対派の人間が出てくるのは明らかだ。そもそも、俺のように他人に興味のない人間だっているからな」
「先輩……」
「ご、ごほんっ。まだ問題は山積みだぞ。会場は体育館だとして、全校生徒が入るだけで一杯一杯なのに、そんな所でゲームが出来るはずがない。分かったか一色」
「むぅ……わかりました……」
どうやら納得して頂けたようでなによりだ。
決して俺がそんなサヨナラパーティーに参加したくないとかそんな私情はこれっぽっちも挟んでないが、一色が素直に認めてくれたのは有難い。
自分の意見と食い違っても、相手の意見が正しいと思ったら素直に相手の意見を受け入れることなど、簡単には出来ることではないだろう。
一色は相手のことを受け入れることが出来る人間である。その点については、こいつの持ついい所なのだと思う。
肩を落として無茶苦茶悔しそうにしてるけど。
「で、どうしたらいいんですか？」
「簡単なことだ。人数が多いなら絞ってしまえばいい。実際、体験入学に来た奴と関わる生徒なんてそう多くはないだろう。部に入ってる人間やクラスの数少ない人間だけだ」
「なるほど……」
「参加するか否かの紙でも配れば、参加する生徒も分かるだろう。自主的に参加する生徒ならば多少集金しても問題ない。これで問題は解決だ」
「流石先輩ですっ！その調子でゲーム内容も考えてください」
「バカっお前、みんなが楽しめるようなゲームを俺が知っていると思ってるのか？てことで後は副会長任せたぞ」
「ああ、助かったよ比企谷」
……何度聞いてもいい響きだな。『比企谷』と『副会長』、お互いに呼び名があるのは。初めての男友達かもしれない。

「じゃあ俺は帰るけど、いいか？」
「えー、待ってくださいよぉ～。私先輩と一緒に帰るつもりだったんですけどー」
「えー、じゃないよ。今日の俺の仕事終わっただろ……」
「ダメです、先輩に拒否権なんてないんです！だから終わるまで待っててください」
「はいはい、わかったよ……」
かくして俺は生徒会の仕事が終わるまで書類チェックをさせられるのであった。

俺は、なぜだか彼女が気になる

サイゼで晩飯を食べ終えた俺と一色は公園に来ていた。
と言っても、子供用の滑り台とブランコに鉄棒が置いてあるだけの、簡素で何の変哲もない小さな公園だが。
そこで俺と一色はブランコに座り、ゆらりくらりと足を地面へ付けたまま揺れていた。
下を向いていた一色が、ふと顔を空へと上げぶっきらぼうに俺を呼ぶ。
「せーんぱーいー」
「なんだ」
「なんでこんな夜遅くまで付き合ってくれるんですか？」
時刻は既に２０時を回っている。
俺にとっては正直どうでもいい質問だったが、一色の声音が低かった。その雰囲気からしても、何となく感じ取ってしまう。一色にとっては大事なことなのだろうと。
ならば、俺はその答えを誠実に返すしかない。
「こんな所に女一人を置いていくわけにはいかないだろ。急にまだ帰りたくないなんて言い出して」
「あはは～……それを言われると耳が痛いです」
「全く……まぁそれに、お前といるのもそんなに悪くないからな」
何だかんだで小町に似ている所があるしな。むしろ新しい妹ができたまである。
面倒見があるとは、きっとこういうことを言うのだろう。
そんなことを考えていると、一色はしばらく俺の顔を見つめると同時に、何故か頬を赤らめていた気がした。
暗闇の中にいるので、悪魔で気がしただけだ。
「……そうですか」
「ああ」
再び、今度は俺も揃って空へと顔を向けた。
しばらくの沈黙が続くが、どこかこの空間が心地よいように思えて

くる。
　これもきっと彼女のおかげなのだろう。あれから孤独へと戻った俺に声をかけてくれた、唯一の救い人なのだから。
「……まだ帰らないのか」
「はい、もうちょっとだけ」
「そうか」
　俺は知ってるんだ。言葉がなくとも人は会話ができるのだと。言葉がなくとも相手に意思を伝えることは出来るのだと。
　ろくに会話してこなかったからな。
　休み時間の寝たふりとか、頼み事をされた時の嫌そうな表情とか、仕事中のため息とか。
　……もちろん、それが全てではないが人の心は、気持ちは言葉がなくとも伝えることができるのだ。
　だって、言葉がなくとも意思表示はしてきたから。
　長年続けてきたボッチの中で育んだ技術と、まだ半年も経たない時の中で知り得た一色という女の子。
　その二つのおかげで、俺は一色の心情を知ることができた。
　この場を離れたくないのだと。
　絶対にそうとは言い切れないが、間違ってはいないだろう。なぜなら、不思議と俺も同じ感覚に囚われているから。
「先輩……」
「ん？」
「……なんでもないです」
「そうか……ところでもうこんな時間なんだけど、まだ帰らないでいいのか？」
　スマホのロック画面を見ると、そこには２１：００ときりよく数字が表示されている。
　さすがに高二とは言え、こんな遅くまで男と二人で外に連れ出すのはマズいだろう。警察にでも見つかったら逮捕されるのは間違いない。いや、何も変なことはしてないけどね？
「そうですねー、そろそろ帰りましょうか。私もこれ以上は親に怒ら

れてしまいそうなので」
「だな……ほれ、行くぞ」
　立ち上がり、歩き出そうとする。しかし、なぜか一色は立ち上がったままこちらをキョトンと見ているだけだった。
「どうしたんだ」
「いえ、その……すぐそこなんで大丈夫ですけど」
「いや、しかしな……近いとは言えど変な奴に絡まれないとは限らないだろ。お前になんかあったら親御さんに申し訳が立たなくなる」
「……はっ!?なんですか段階すっ飛ばして親に付け込もうとしてたんですかごめんなさい一番最初は私からにしてくださいすいません」
「はいはい、さあ早く行くぞ」
「む～、素っ気なさ過ぎないですかね。こんな美少女なのにー」
「そうだなー」
　ことごとく彼女に塩対応を食らわせ、俺はそそくさと一色の歩幅に合わせ先へと進んでいく。
　俺が素直になれない理由。
　それは他でもない俺が知っている。
　だから俺はその理由を知らないようにするために繕い隠すのだ。
　他でもない、俺のために。
「先輩ここです」
「おう、じゃあまた明日な」
「はい、ありがとうございました……おやすみなさいです」
「ああ」
　一色が家の中へと入っていくのを見送ると、俺は帰路へと立った――。

一色いろはは自由気ままである

カナダにあるハンワースセカンリースクールから来る体験入学のサヨナラパーティーの件。それから、生徒総会の件。

両者の仕事も後半まで行き着き、ようやく終わりが見えてきた。

そろそろ俺がこの場で手伝うことを辞めてもいい頃合いだと思うのだが、一色はさらさらそんな気はないらしい。

見事に返り討ちにされた。

そんなこんなで今は業務スーパーへと来ている。

学校からの経費、サヨナラパーティーに参加する生徒から一色が搾り取っ……ごほんごほん、集めた金で買い物している最中だ。

「先輩ー、これなんかどうですかー？」

指差す彼女の目の前にあるのはグミであった。

「なんでグミなんだ……」

「グミ美味しいじゃないですか～」

「確かに美味しいけどな。でも却下だ。そんなパーティーらしくない食べ物があってたまるか」

「えー……ケチですね先輩は……」

「駄々こねてもダメだからね。ほら、買うものは事前決めてあるんだしさっさと買うぞ」

「はーい」

渋々といった感じでスマホに書き込んだ購入リストに目を通しながら、カートに商品を乗せる。

クッキーから一口チョコ、大サイズのジュース。その他にも生徒が好きそうな菓子を次から次へと追加していく。

「こんなもんか」

「ですね。人数もざっと七、八十人程度ですしこれで充分だと思います」

充分と言っても、俺と一色が一つずつ山盛りになったカートを引いてレジまで進んでいるので、かなりの量を買い込むわけになるのだが。

会計の際に店員さんに領収書を頂くようにだけ頼み、金を払う。
よほど量が多かったのか、店員さんがレジ袋に詰めるのを手伝ってくれる。いや、ほんと助かります。
「ふぅ……後は平塚先生の車に乗せて終わりだな」
「ですねー、やっとおしまいです」
頭の悪い子でもわかる話だ。
こんな馬鹿みたいな量を手で抱えて帰れるわけがない。外で平塚先生が車を用意してくれているので、とっとと運ぶことにした。
「平塚先生、ありがとうございます」
「ああ、君たちも気をつけて帰るのだよ」
「はーいっ」
平塚先生の車が出ていく所を見送り、やっと終わったとばかりに一つため息を吐いた。
「じゃあ先輩、そろそろ帰りましょうか」
「あぁ、ちょっと待ってくれ。トイレ行ってくる」
ゴミムシを見るような目線で睨まれるが、仕方ないとばかりに一色は「はい……」と返事を返す。
あまり待たせるわけにはいかないので、目当ての場所へと行き、スグに一色の元へと戻った。
「悪いな、ほれ」
「ふえぇ？」
状況がいまいち飲み込めていないようだったが、俺は俺で照れくさいので先に歩いていってしまう。
「せ、先輩っ！待ってくださいよー。これ！私からもどうぞ！」
「お、おう、ありがと」
「い、いえ……こちらこそありがとうございます」
俺が一色に渡したものと、一色が俺に渡したもの。それは互いの手にしっかりと握られている。
トイレに行くふりをしながら密かに買いに行ったグミと、恐らく店の入口近くにあった自動販売機で購入されたＭＡＸコーヒー。
大したものではないが、それでも心のこもったものだというのは俺

ですらわかる。
「夜飯……どっか寄って食べてくか？」
「はい！そうしましょう。えへへ、最近は先輩と夜ご飯食べてばかりですね～」
「そうだな」
新しい目的地が決まった俺たちは、そこへと向かって歩いていく。
特に何かある訳でもない。
それなのに、ただそれだけで心地よかった――――。

名前の知らない彼女はアイツに似ている

四月も下旬となり、とうとう現れた体験入学生。
そして日は流れ、明日はサヨナラパーティーだ。体育館内で生徒会メンバーや先生含め、参加する生徒も大掛かりで準備に取りかかっている。
「生徒会長、これはどこにやればいいですか？」
「あ、はい。それはあそこに――」
不精する一色も、今日ばかりは奮励しているようだ。
俺は汗水垂らしても、尽力してもいないが、これでも頑張って仕事に努めている方ではある。
なんせ俺、力仕事とかあまり得意じゃないからね。
「あっ……」
一瞬だが一色に睨まれた気がする。
一色検定３級保持者（資格を勝手に入手）の俺は、一色の今の一瞬の行動に込められた意思を読み取ることができた。
誰にも気づかれていないであろう、睨んだコンマ数秒の間。その刹那に読み取った内容は――
『お前、私が本気で仕事してるのに？気に働いてるとかいい度胸だな』
である。
間違いなくこんな意味をはらんだ目つきだった。
いろはす怖い！やめて！怖い！
いや、ほんとにちゃんと働いてますよ？そもそも俺、生徒会のメンバーでもサヨナラパーティーに参加するわけでもないんですよ？完全なとばっちりじゃないですか……
それに……俺は一人で仕事しているから、どうやっても重い物を運ぶのに時間がかかるんだよ……なんたって俺、ボッチだからね。
それと俺は――学校中からの嫌われ者だから。
周りを見れば、皆が二人三脚となって動いている。
まあ自分から進んで周りと協力しようなんざ、さらさら思っていない。それでも一人で作業することが、どれほど効率の悪いことか俺は

知っている。
一緒にやってくれそうな人、手当たり次第に当たってみるか……
「なあ、何か手伝えること――……」
「お、おいっ、あっちの方手伝いに行こうぜ」
「そ、そうだな」
近くにいた二人組に声をかけてみたが、スルーという想像通りの結果になる。
見たところ一つ下の二年の者たちだろう。俺の噂を知らない者がいるのだとしたら一年の奴らになるのだが、やはり俺の噂は一人残らず耳にしているはずだ。
畢竟、俺と協力関係となってくれる人間など存在しなかった。
一つため息をつき、スグ仕事に戻る。
相手を探す時間が無駄だと判断することができた俺は、自分で言うのも何だが有能であり無能なのだろう。矛盾しているが。
さて次は何をしようか。
そう悩んでいるところに悪魔はやって来た。
「せーんぱいっ」
「ああ……一色か、どうした」
近づいてきていることに、さも今気づいたかのように答える。
何故かって？とてつもなく嫌な予感しかしないからだ。化けの皮を被った一色の中にあるおぞましい何を感じ取れるほど、俺はコイツへの危機感地能力を高めていたらしい。
「先輩、今仕事探してましたよね～？」
「いや、そんなことないが……」
一色は一歩コツンと俺に詰め寄り、声のトーンを落として再度問う。
「探してましたよねー？」
「は、はい……」
いろはす怖い！近い！怖い！
なんでめっちゃ笑顔なのにこんな冷たい声が出るんだよ……
「じゃあ丁度良かったです！あそこにある机を全部片付けておいて下

さいねー」
「まさかだけど……山のように積んであるあそこのことか？」
まさかと言わずとも、一色が指さす方には山積みにされた長机しかない。
「当たり前じゃないですか」
お前はアホかと言わんばかりに呟き、ゴミを見るような目を向けられ、挙句の果てにはため息を吐かれる。
ゲームであれば三コンボという表示が出ているところだ。
口答えすれば罵詈雑言を並べられることは目に見えているため、言い返しはしない。
おっくうではあるが、どちらにせよ仕事を探していたので丁度いいだろう。
「へいへい、わかりましたよ」
「はい、わかればいいんです。……はー、すっきりした」
聞こえないように言っても丸聞こえだからね？むしろ嫌味なの？そんな子に育てた覚えはありませんよ。
一色がスタスタと別の場所へ走っていく様を見て、俺は机運びを始めた。
なかなかの重量がある長机。三往復ほどしたところで、「もう仕事したくない！」と告げんばかりに腰が痛みを伝えてくる。
「はぁ……――ん？」
痛みなど気にしたら負けであり、俺は四往復目へと差し掛かったのだが、持っていた長机の後方がふと軽くなった気がした。
「手伝い、ますよ」
振り返ると、そこには見覚えのない女子が長机を持ちながら立っていた。
身長や制服の着慣れさを見るに、今年入学してきた一年の生徒であろう。
流れるような黒髪に少しあどけなさがあるものの、大人びた美少女であり、才色兼備であった彼女の姿を思い出すほどに相似していた。
「他の奴とは、仕事しないのか？」

「一緒にやる人、いないですから」
「そうか」
悲しいことに、友達がいない所まで同じらしい。
それでも、彼女は自らの意思で俺の手伝いをしてきた。その点については、孤高であったアイツとは違うかもしれない。
「……俺なんかと一緒にいていいのか？」
「別に……そういうの気にしてませんし」
残念なことだが、これ以上俺は会話を振ることが出来ない。ボッチなんてそんなもんだ。
「比企谷先輩は、なんで手伝いなんかしてるんですか」
「生徒会長に付き合わされてるだけだ」
「へー……仲良いんですね」
「そうでもないけどな……」
「まあ、どうでもいいですけど」
「だな……お前は何でこんなことしてるんだ。パッと見興味無さそうにだけど」
「内申稼ぎですよ。親も生徒会に入れって言ってますし、まあ参加するのも悪くはないかなって」
「そうか……」
無言。
これ以上ないとまで思わされるほどの無言。
そもそもボッチに会話なんてモノは必要なかった。会話なんてしなくとも生きていけるしな。
「なあ――」
だが俺は、ただ一つだけ聞いておきたかったことがあった。
「お前は、友達って必要だと思うか？」
「……どっちでもいいんじゃないですか。人それぞれですよ、そんなこと」
「そうか……」
彼女はこれから先、きっと上手くやれる。
何となく。

何となくであるが、そんな気がした。
未来のことなど、誰にもわからない。
俺にも、名前の知らない彼女にも、学校の先生も。それが当たり前であり、それが自分の人生である。
今までの事を後悔しても、もう遅い。
だから、これからを精一杯生きるしかないのだろう。
そんなことを思いながら、俺は彼女と仕事を進めた――――。

嫉妬する彼女は謎である

「まあ、なんだ……助かった、ありがとう」
「いえ、別に礼を言われるほどのことではないので」
時刻は七時過ぎ。
放課後から動き始めて、よく準備がここまで上手く出来たものだと自負する。
会場内の飾りつけ、舞台上の演し物の小道具、パーティーのためのテーブル並べ。
客観的に見ても、どれもが完璧に整っている。
参加した生徒は解散となり、俺は手助けをしてくれた彼女に礼を言った。
「そうか。まあ、お前がいなきゃここまで早く終わらなかったし、感謝はしてる」
「はい。それとお前じゃなくて、雪風雪菜です。名前でちゃんと呼んでください」
「あ、ああ……雪風な、覚えとく」
名前まで似ているとはな……
正直、ここまで来ると偶然とすら思えなくなる。
「じゃあ比企谷先輩、私は帰ります。お疲れ様でした」
「おう、お疲れさん。気を付けて帰るんだぞ」
「ありがとうございます」
これは運命か、神様のいたずらか。
それは俺にはわからない。
そう。
ただ、彼女の帰る様を見届けた後――パンチを食らうことしか出来なかった。
「なんだよ一色……」
なんで後ろから意味もなく殴ってくるのか……若干痛い……
「何でもないですよ。何でもないです」
「なんで二回言ったの……それと痛いからまた殴るのやめようね」

「先輩が悪いんです」
「今何でもないって言ったよね？　だから殴るのやめようね」
「むぅ……」
　如何にも不満そうな顔をし、一色はしぶしぶと手を収めた。
「今の子、先輩のお知り合いですか？」
「逆にお前は知り合いだと思ったのか？」
「いえ、全然。あんな可愛い子がこんな先輩に好意を抱くわけありませんから」
「……まあ、そういうことだ」
　好意と知り合いかどうかは意味が異なるし、俺のことを呼ぶ際に『こんな』を強調しなくてもいいんじゃないですかね……それと、初めからわかってるなら聞くなよ……
「で、どうするんだ？」
　内容の乏しい質問をしたが、今までの流れからしてこの後どうするのかという意味になるのは、流石の一色でもわかるだろう。
「今日はもう少し残るつもりです」
「そうか……じゃあ早く終わらせるぞ」
「いえ、先輩は先にあがって大丈夫です。小町ちゃん達にも先に帰ってもらいましたし、先輩に申し訳ないですよ」
　突然だが、人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し、ということわざがある。
　人生は長く苦しいもので、努力と忍耐を怠らず一歩一歩着実に歩むべきという意味のことわざだ。
　今の一色はきっと、人生の中で特に重荷を背負っているのだろう。
　であれば、俺に出来ることはただ一つ。
　その重荷を一緒に背負ってやることである。
「らしくないな、そんなこと気にするなんて。まぁあれだ。もう暗いし、どうせ少し遅くなるかどうかの違いだ。気にするな」
「らしくないってなんですかー。私って色んなことに気が回るし、誰にだって優しくしますよー」
「はいはい、そうですね。ほれとっとと行くぞ」

ふくれっ面になっている彼女をスルーしながら俺は体育館から生徒会室へと移動を始めた。とことこと歩いて付いてくる一色も、なかなか愛嬌があるものだ。

小町と似ているせいか、妹のように接してしまうことだけは気を付けなければならない。なんせ、お兄ちゃんスキルが発動して頭でも撫でようものなら罵倒を浴びせられることは目に見えている。

「さて、と……始めるか」

生徒会室にたどり着いた。

中には副会長や書記ちゃんがいると思ったのだが、どうやら他の場所で仕事を進めているらしい。

俺達の仕事はいつものこと。莫大な量の書類確認である。

「はい！」

彼女は笑って相槌を打った――。

デートという名の召使い

体験入学も無事終わり五月の中旬に差し掛かった頃。
空はお日様の支配下にあるように晴天で、休日ということも合間って千葉駅前は人で活気づいている。
「はぁはぁ、おはようございます。先輩遅くなってすいませんっ」
一色が俺のもとへと、ててっと小走りでやってきた。
「おう超待ったぞ、おはよ」
いろはす、おっそーい。と不満げに言うとむすっと表情が変わる。
「むぅ～、前にも言いましたけど、ここは今来たところだよとか言うべきじゃないですかね？」
「お前相手にそれを言ってもな……」
実際に待たされたし……。
約束の時刻は１０時丁度。手持ちのスマホを見て時刻を確認すると、そこには１０時１０分と記されている。
東口側の一つの柱が俺たちの集合場所になっているのだが、もう何度もここを待ち合わせ場所にしているため俺を見つけれなかったということはまずない。
つまるところ、単純な遅刻だ。
「なんですかそれー、こんな美少女とデートできるだけで光栄なことなんですよーっ」
「はいはい……そりゃありがとうございます」
「それ絶対に思ってないですよね……」
ああ、と相槌を打つ。
それもそうだろう。俺が好き好んでデート（と勝手に一色が言っているだけ）などするはずがない。
こうなった理由は昨日に遡る――
「先輩、明日暇ですよねー？」
生徒会の手伝いが終わり帰り道。
隣でちょこちょこと歩くに尋ねられた。

「ああ、残念ながらすっごい予定詰まってるわー」
この流れはいつもの、デートに誘うフリして荷物持ちやらなんやらこき使われておしまいなパターンだ。
さすがの俺もそろそろ学習する。完璧なまでの返答をした。
「暇なんですね」
「な、なんでわかった……」
「だって先輩、棒読みなんですもん」
俺の行動は全て読まれていたらしい。
これが比企谷検定三級保持者の実力か……。
「じゃあ明日千葉駅に１０時待ち合わせで、よろしくですっ」
「お前他にもついてきてくれる人沢山いるだろ……なんで俺が……」
「先輩、諦めって肝心ですよ。逆になんで目の前に付いてきてくれる人がいるのに別の人誘わなきゃいけないんですかー」
「た、確かに……」
なぜか一色が言うと説得力がある。
そしね悲しいことに、俺に白羽の矢が立った瞬間だった。
「てことで明日よろしくですー」

――と、こんな感じだった。
まぁいつものやつだ。
「それで、今日はどこに行くんだ？」
「えっとですね、まずショッピングモールで服を見てから、先週出来たばかりのスイーツカフェに行こうかと」
「はいよ……じゃあ行くか」
「はいっ」
一色が隣で歩く。
彼女の歩幅に合わせて俺も目的地へと向かう。
それからは、なんの他愛もない雑談をし、気づけば一色は洋服屋の試着室へと入っていた。
「先輩先輩～、これなんかどうですか～？」
一色が試着して身に纏っているのはピンクニットにデニムズボン

のカジュアルコーデというものだ。
小町が家でよく騒いでいたので覚えている。
「おう、似合ってるんじゃねぇの」
「むー、イマイチの反応ですね……」
上手く褒めたつもりだったのだが、一色はあまりいいようには受け取っていなかったようだ。
すぐさまカーテンを締め、別の服に着替え始める……が。
「拷問かなにかかこれ……」
ボソッと俺は呟いた。
先程から一色が着替える時に聞こえてくる、布の擦れる音がどうにも心臓に悪い。
いや決して変なこと想像してるわけじゃないですけどね？この先に一色が下着姿でいるとか想像してませんけどね？
懸命に思考を真っ白にしていると、どうやら着替えが終わったらしくカーテンが開けられた。
「じゃーんっ、これなんかどうですかー？」
一色は白のワンピースを完璧に着こなしていた。
これから暑くなっていくことを考えての選択なのだろうが、少し肌寒いのではと思う。
いや……そう無理矢理に思わせた。
「せーんぱい？」
「お、おう……まぁ、なんだその……似合ってるんじゃねぇの……」
少し目をそらし、先程と同じ返答をする。
素直にぶっちゃけるなら、無茶苦茶似合っている。
前々から白い服が似合うとは思っていたが、ここまで俺に効果抜群だとは思いもしなかった。
可愛いと思うのは少し癪である。
「ほほぅ、先輩はこれが気に入ったんですね～。じゃあこれ買ってきます！」
「お、おい……」
パシッとカーテンを締められ、僅かな時間で元いた姿へと戻ってい

た。
ワンピースを持って会計へと向かう一色の姿を見て、こう思ってしまった。
……それだけ早く着替えれるならなんで遅刻したんだ。

彼女の名前は今も俺の心の中に存在する

ショッピングモールでの買い物を事なきを経て、俺たちはスイーツカフェへと向かっていた。
「ねえ先輩」
「どうしたんだ？」
「やっぱなんでもないです～」
「そうか」
先ほどから一色が折々こちらを見てくるのだが、非常に落ち着かない……。
変に思われないように平然を装いながら進む。
「そういやお前、今年も続けて生徒会長やるのか？」
「ふぇ？急にどうしたんですか」
「いや、なんとなく……もう三ヶ月もしたら生徒会役員選挙の時期だからな」
「ん～、多分続けると思いますよ」
「そうなのか、意外だな」
正直一色のことだから、「なんで私がそんなことしなきゃいけないんですかー」と言い出すくらいにはやる気がないものだと思っていた。
「あーっ、今心の中で私に対して無礼なこと考えましたよね！先輩酷いですー」
「悪かったって……」
「これでも生徒会のこと結構気に入ってるんですよ。みんないい子ですし、楽しいですし。あと内心貰えるので」
「最後のがなかったら素直に褒めてたのにな」
「なんでですかーっ」
頬をふくらませながらそっぽを向く一色。
少し顔を赤らめながら、掠れるような声量でボソッと本音を吐き出した。
「……一緒に先輩といる時間も増えますし」

「ん、なんか言ったか？」
「なんでもないですよー。あ、あそこです、早く行きましょ！」
「はいはい」
　目前にあるスイーツカフェが見えたことによって足早になる一色。それに俺もついていき、洒落た看板がかけられた扉を開け進んでいく。
「お客様、二名様でよろしかったですか？」
「はい、大丈夫ですっ」
　ではこちらになりますと、店員が案内をする後に可愛らしくとてとてと一色が追っていく。
　うわー、あざといなぁ……さすがあざはす。
　スタッフはイケメンの男性ではなく楚々な女性だったのに、こうも可愛く振る舞いをしていると素直に誉め言葉しか出てこない。あざはす。
「では注文がお決まりになりましたらお呼びください」
「はーい！先輩なににします～？」
「俺は別になんでも……一色はどうするんだ？」
「ん～、私はこのパンケーキとプリンアラモードにしようかなと。友達からこれが美味しいと聞いたので」
「お前……そんなに食べるのか」
　女子なのにな……と一色の方へ半ば哀れみの意を込めた落胆の眼を向ける。
「な、なんですか。どうせ私たくさん食べても太らない体質ですしいいんですー」
「はいはい、じゃあ俺はこのコーヒーゼリーパフェってやつにするよ」
「じゃあ店員さん呼びましょうか」
「そうだな」
　テーブルに置かれているベルを鳴らす。
　後は一色が注文をしてくれるだろう。なんせ俺、こういうところ来ないから苦手だし。むしろ人と接するの苦手だし。
　それにしても……少しリア充が多すぎじゃないか……青春を楽し

む愚か者ども、砕け散れ。
しかし、この状況。傍から見れば俺が思ってることを他の人たちも思っているのでは？それはそれで嫌だな……。
「せーんぱい、暇なんでなんか話してください」
「お、おう。もう注文は終ったんだな」
「は？何言ってるんですか、先輩が自分の分言わないからさっき先輩の分まで言ってあげてたじゃないですか」
ガチトーンで声を発しながら、ため息をつかれる。
いや怖い、俺が全体的に悪いんだけども。
「す、すまん……」
「もういいです。ところで先輩、もう志望する大学とかって決まってますよね？」
「ああ、そりゃ決まってるけど。それがどうしたんだ？」
「いえ、なんとなく。……結衣先輩とかと、一緒だったりするんですか？」
「――ッ!?」
つい肩を上げてしまった。
由比ヶ浜の名前を聞いて、俺は心臓の鼓動が一瞬爆発的に早まったように感じる。
「……いや、聞いてないからわかんないな」
いけないな……こんなことで動揺してるようじゃ……。
「そうですか……ごめんなさい、変な事聞いちゃって」
「問題ない、たまに他のやつからも聞かれたりするからな。それより、とっとと食べようぜ。乗ってるアイスが溶けちゃうから」
「はい」
前回ので俺はしっかりと学習したからな。
一色と無駄話や写真なんか撮ってるのに付き合っていたらデザートが台無しになってしまうことを。
先ほど運んできてくれた店員さんにも申し訳がたたなくなる。
ちょっぴり苦いコーヒーゼリーを口にしながら、俺は先ほどの会話を頭の中から切り離した――。

俺と雪風の後ろには、彼女がいる。

「平塚先生、何の用ですか」
「ああ、やっと来たか比企谷」
眠気がさす午後の授業を終え、俺は重ったるい身体を運ばせながら職員室に呼び出されていた。
もちろん、呼び出し主は俺の目の前で堂々と脚を重ね居座る平塚静先生。
腰付近まで長い黒髪を下ろしているアラサー女性の彼女は、まぁ容姿だけで見れば綺麗な部類に入るはずなのだが、生徒の前でタバコを吸うその姿勢が全てを台無しにしている。
「ふぅ……さて、場所を変えるか」
「そうすね」
一本のタバコを吸い終えた彼女が立ち上がり、別室へと足を運ぶ。
足先は間違いなく俺が何度もお世話になった相談室という名の、説教室。これなら生徒指導室でもいいのではと思う。
あー、俺なんかしちゃったかな……まあ、心当たりあるんだけど……。
「座りたまえ」
「はい」
相談室に入ると言われるがままに、革で作られた赤茶色のソファーに座り込む。
俺の隣に女子がいなければ、座り心地はさぞかし最高だだろう。
「なぜ呼び出されたかは、言わずともわかるよな？昨日の雪風の件だ」
「……比企谷先輩は関係ないはずですけど」
少し強ばった表情をしている雪風。少し震えている手を、両手合わせて隠そうとしている様子を見るに、かなり緊張しているのだろう。
「比企谷も雪風が巻き込まれだ場所に居合わせた当事者なんだ。関係なくはない」
「ああ。あと雪風、お前は悪くないからそんな身構えなくていいぞ」
「比企谷の言う通りだ、君たちは悪くない。どう見ても絡んできた他

校の生徒に非がある。……しかし、なぜ夜遅くにあんな場所にいたんだ」

――それは昨日のこと。

受験生である俺は、学校帰りに予備校で学習をし終えたあとの事である。

２２時を回りそうな時間。

晩飯はサイゼにしようと千葉駅の近くを自転車で走っていたとき。

今にも消えかかりそうな細い声が聞こえてきた。悲鳴に近い、怯えてるような声音だった。

「や、やめてください……！」

一度自転車を漕いでた足を止め、声のする方へ顔を向けた。

「いいじゃん、俺らとちょっと遊ぼうぜ。君、総武高の子でしょ？頭良くて可愛いとか最高だね！」

「ほらほら、カラオケ行こうよ」

「奢るからさ～！」

飲食店が連なる間の細道で、黒髪の女の子が地元の高校生と思わしき男性三人に声をかけられている。

あからさまなナンパだ。女の子の方は断りを入れてるのにしつこく付きまとってることを考えれば、それ以上の輩かもしれない。

こんな人が沢山目に付く場所でよくやるな……。

君子危うきに近寄らず。

普通に飲食店から居酒屋まで並ぶこの場所では、仕事終わりの人間など人が多く通る。

あんなのに絡まれるのは御免こうむるし、俺が助けようとせずとも他の人が何とかするだろう。

「……行くか」

再びペダルに足をかけ、少し罪悪感を覚えながら一度女の子の方を見ると目が合ってしまった。

そそくさと行けばよかったものを、俺は後悔した。

男子高校生に絡まれていた女の子は――雪風雪菜だったのだ。

「はぁ……」
これは助けないわけにはいかないか……。
見ず知らずの人ならまだしも、彼女には恩がある。
恩返しにはもってこいの場面だろう。
「こんな所で何してるんだ雪風」
自転車を置き捨て、近寄る。
「ひ、比企谷先輩……」
「早く行くぞ」
とっととトンズラするのが吉だろう。
人が多くいる場所まで移動してしまえば、こっちのものだ。
雪風の手首を掴み、多少強引に連れ去る。
「おい待てよ――」

――とこんな感じであった。
最後に男子高校生から顔面を殴られたのは、正直泣きそうなほど痛かったが、幸いにもそれがきっかけで通り人がケータイで通報の電話を入れてくれた。
そのおかげで向こうの生徒は早々に消えてくれたからな。
その後は学校側が昨日の事件に巻き込まれた生徒を探し出すと、いとも簡単に見つかって今現在に至る。
どうやら雪風の両親が学校に帰りが遅いと連絡を入れていたようで、それと俺の殴られ怪我をし切れた唇が相まって見つかるまでにそう時間はかからなかったようだ。
「……」
「雪風、別に言いたくないなら無理して話す必要は無いぞ」
「はい……」
「ふむ……では仕方ない。理由は分からないが、昨日のように夜遅くに一人で出歩くのはやめるように。今日はこれでお開きだ」
平塚先生が相談室を出ると、それに続いて俺と雪風も退出した。
「すいません、迷惑かけて」
「別に……そんなこと思ってねえし」

下駄箱へ向かう途中で、ふと雪風が謝罪の言葉を並べる。
「思ってなくても、実際に迷惑かけたことは事実です。怪我もさせてしまいましたし……ごめんなさい」
「だからいいって……」
痛かったのは確かだが、骨折やテニスのラケットを頭部に当てられるよりは何倍もマシだ。
「……よければ食事でもどうですか？お詫びに」
「そうだな、丁度飯くいに行こうと思ってたから行くか」
そのまま俺たちは二人揃って校舎を出ていった――が、その後を付けてくるものに、俺は気づかなかった。

エリートぼっちの連絡先交換

「なあ雪風、なんか食いたいもんあるか？」
いつもの千葉駅周辺。学生には優しいファミレスやマックなど、様々な飲食店が連なっている。
そこで、雪風に食べ物の要望を聞いてみる。
「特に私は。そこまで詳しくもないですし、一人で来るときはいつも手軽な物で済ませちゃいますし」
「そうか。俺もそんな感じ何だが……サイゼでいいか？」
「はい、大丈夫ですよ」
決まったところで、俺たちは目当ての店へと入って行った。
店員に案内され着席すると、雪風は唐突に謝り始める。
「比企谷先輩、先日は本当にすいませんでした……私のせいで巻き込んでしまって……」
「別に気にするな。それに、俺だってサヨナラパーティーの準備の時はお前に助けられし」
「あ、ありがとうございます……」
「ああ。とりあえずメニュー選ぼうぜ」
「そうですね」
俺は安定のミラノ風ドリアとドリンクバーを、彼女はシーフードグラタンとプチフォッカという焼きたてパンを選んだ。
それからしばらくして注文して料理が運ばれて来る。
それまでは雪風の家庭の事情や悩みを聞いていた。あまり俺が何か言えるわけでもないので、あくまで聞いて相槌を打っていた程度だが。
親が厳しいことは察していたが、まさか大手企業の社長を勤めているとは思わなかった。他にも、予備校の通う日数もとても多いらしく大変らしい。
さすが、アイツと同じＪ組の生徒なだけはある。
「ところで、そのプチフォッカってやつ美味そうだな。俺も頼んでみようかな」

「よければ一つ食べますか？」
「いいのか？それじゃあ言葉に甘えて……っと」
一つ取って渡されたそれを口に入れる。
まだ温かく、とても美味であった。
「ん……美味いな」
「ですよね!!」
「お、おう……」
急に喜んで飛びついてきた。
自分の好きなものを他人が理解してくれることの嬉しさは分かるが、雪風にもこんな一面があるんだな。
そこら辺はアイツとは、やっぱり違うよな。
「比企谷先輩のそれって美味しいんですか？私ドリアとか食べたことなくて」
「ああ、何なら食べてみるか？ほれ」
持っているスプーンでドリアを取り、雪の前へ差し出す。
「え、え……これってあーんじゃ……」
「どうした？持たないのか？」
「そ、そうですよね」
雪風の消え入りそうな声は聞こえなかったが、特に問題もなさそうだ。
「ん、美味しい！　今度きた時はこれにしよ……」
「それならよかった」
その後は何事もなく食事を終え、雪風を家の近くまで送って解散となったのだが……
「比企谷先輩、よかったら連絡先交換しませんか？」
なんて言われるとは思わなかった。
もちろん俺にだってラインくらいはスマホに入れてあるが、友達は小町と両親と戸塚くらいしかいない。流石エリートぼっち！
しかし俺は後輩の強い押しに為す術もなくラインの連絡先を交換してしまった。
そして帰宅してから1時間後。

雪風から「お疲れ様でした」と送られてきたメッセージにしばらくの間苦悩しながら返信する内容を考えた末に「ああ」とだけ送っておいた。

戸塚彩加は天使である

そろそろ学生服のＹシャツも、長袖から半袖に衣替えする時期になる。

いつから変えようかと悩みながらも、俺は学校帰りに書店へと寄っていた。

今日はゲゲゲ文庫の新刊の発売日なのだ。

毎月１８日に新刊発売がされるので、特別用がなければこの日は必ず本屋さんに寄るようにしている。

他にも１０日は電電文庫、２０日はファンタズム文庫、２４日はＦＭ文庫はそれぞれ新刊発売日となっているので、書店に足を運んでいる。え？キモいって？ラノベオタクだから仕方ないよね、てへぺろ。

「ワタリ先生の新刊は……っと、あったあった」

『ガールズナンバーズ』というタイトルの本を手に取る。

相変わらず、みかんエイト先生のイラストは神だな、うん。

早速会計のためレジへ向かうと、文芸書が並ぶコーナーであたふたしている女の子……いや、男の娘が目に映った。

戸塚彩加だ。

俺と同じ、総武高に通う生徒の一人で二年の頃はクラスも一緒だった。

久しぶりに見たな……いや、俺が普段から気にしていないだけで、普段学校で見合わせているはずだが。

「あ！八幡！」

こちらに気づいたらしく、声をかけて来る戸塚。

声変わりがまだ来ていないのだろうその声質は、女と言っても通話越しならきっと信じてしまう。

そんな可愛らしい声をかけられた俺は懐かしい感覚に陥りながらも返事をした。

「久しぶりだな、戸塚。こんな所で何しているんだ？」

「うん、それがね……えっと、この本を探しているんだけど、なかなか見つからなくて」

はい、っとスマホの画面を差し出して来る。
そこには、有名なテニスプレイヤーの特集本が写っていた。きっと一テニスプレイヤーとして気になって購入しに来たのだろう。
「ああ、その本ならここじゃなくてあっちの方にあると思うぞ」
こんな特集本が、文芸書が置いてある場所にあるはずもない。
付いて来いと言うように、俺は目当ての本がありそうな場所へと向かった。
「お、あったぞ。これじゃないか？」
ファッション雑誌なんかが置いてある場所に来ると、割とすぐに戸塚の欲しがっていたものは見つかった。
「そうだよこれ！八幡ありがとっ！」
満面の笑みを浮かべて、お礼を述べる戸塚。
「お、おう……」
可愛い、可愛い、ハスハスしたい、抱きしめたい……!!
ゴクリ、と唾を飲み込むと駆られた衝動を抑えるように手を拳の状態にして握りしめた。
自然と頬が熱くなるのを感じた。
病気かな？病気じゃないよ、病気だよ（病気）。
はい、病気ですね。本当に天使だ。
「じゃあ早速買って来るね！」
「ああ、俺もこれ買うから一緒に並ぶか」
「うんっ！」
レジの並びに入ると、戸塚が少し心配そうな顔をして訪ねて来た。
「八幡さ……最近どう？三年に上がってからクラスも別々になっちゃったし……」
「まあ……至って普通だな……強いて言うなら、副会長とたまに話すくらいで去年とあまり変わらない」
変わらない、なんて大嘘だ。
何もかも変わってしまった。
休み時間にちょこちょこ話しかけに来てくれたアイツや、放課後に活動していた部活も、そこにいたアイツも、全て今はない。

大きく変わってしまったのだ。
「そっか……あ、材木座くんとはどうなの？」
「材木座か、まあたまに学校でもちょっかい出しに来たりラインが来たりする程度だな。アイツ暇そうだし」
「確かに」
そういって苦笑いする戸塚。
「じゃあさ、今度材木座くんも誘って、ボクと八幡と三人で遊びに行かない!?」
「お、おう……別に構わないが」
できれば材木座抜きで二人で遊びたい。
が、そんなことを言えるほどの度胸は持ち合わせていないため、静かに了承する。
「やった！じゃあ帰ったらまた連絡するね！」
そして本を購入した後、戸塚とは別れたーー。

材木座という男は常にやかましい

『八幡、この日空いてるかな？（汗）』

リビングのソファーでケータイゲームをしていると、ピロリンとスマホのバイブがなる。

スマホの画面を見ると、戸塚からのラインの文章がスマホのロック画面に表示されていた。

『ああ、空いてるぞ』

完結かつ素早く戸塚へと返信する。

これが材木座や一色なら無視して、気が向いた時にでも返信するが、ラブリーマイエンジェル戸塚たんの為なら例え平塚先生からの説教中にでも返信する勢いだ。

『じゃあこの日の１０時に待ち合わせねっ！』

既読を付けて終わらせようと思ったが、その後に可愛らしい猫のスタンプが送られてきたため、時間も時間なのでおやすみと書かれたアニメキャラのスタンプを送り返しておく。

俺が送ったスタンプくらい戸塚可愛い。文面でこんな可愛く魅せれるのはやはり、ラブリーマイエンジェル戸塚たんくらいだろう。今すぐでもハスハスしたい。

「さて、寝るかーー」

それから一週間と少し経った五月末の土曜日のこと。

「おい、どうしてこんなメンツになったんだ……」

集合場所の千葉駅前。

俺の目前に集まるメンバーを見て、少し憂鬱になってしまう。むしろ既に鬱状態になっているまである。

「あはは……なんでだろ……」

戸塚もあまり把握していなかったのか、少し戸惑っている。

「クククッ、こんなところで出会うとは驚いたな――待ちわびたぞ、比企谷八幡!!」

「な、なんだとっ!?」
驚いたのに待ちわびてたってどういうことだよ。こっちが驚くわ。
舞い散る白い紙(実際には舞っていない)を掻きわけるようにして、俺は相手の姿を見極める。
果たしてそこにいたのは……いや、知らない知らない。材木座義輝なんて今日呼んだけど俺は知らない。知っていても関わりたくない。
もうすぐ六月に差し掛かるのに、汗をかきながら学生服の上にコートを羽織って指ぬきグローブをはめている。
そんな奴は知っててもしらない。
「はあ……朝っぱらからやかましい」
「そうですよ先輩ー、一目があるんだからもっと大人しくしててください、一緒に居る私の身もなってください恥ずかしい」
「いや、恥ずかしいのは俺も一緒なんだけど……」
何を好き好んでこんな中二病と一緒に居なければならないのだ。
あれほどラインで服装はちゃんとしたものにしろと言っておいたのに。
「はぁ……朝からうるさいわね。バカみたい」
長く背中まで垂れた青みがかかった黒髪の女、川崎沙希がこちらを呆れた眼で見てそう言う。
今日はいつものだらしない制服姿とは違い、清楚感のある私服で来ている。だが、相も変わらずぼんやりとした遠くを見つめるような覇気のない瞳をしている。
「ほら、先輩のせいで沙希先輩が怒ってますよ、どうしてくれるんですか〜」
「いや、だからなんで俺のせいなんだよ……そもそもなんでお前いるんだよ、聞いてねえよ。あれか、ドッキリなのか?こんなドッキリいらないんだが」
「む〜、なんですかそれ〜!」
両手を腰にあて、頬を膨らませてムスッとする一色。前かがみになっているため、一色の平凡な胸も少しばかり谷間が露出された。
こいつ、無防備すぎだろ……。

「もう現実逃避しないで、ちゃんと今の状況を飲み込んでください。ちなみに、私と川崎先輩がここにいるのは～、戸塚先輩からたまたま遊び行くの聞いて無理やり頼み込んで混ぜてもらったからですっ！」
「結局全部お前のせいじゃないか……」
今度は胸を張ってふふんとドヤ顔をする。
ただバカなのか、喜怒哀楽の移り変わりが激しいのか。恐らく前者なので、仕方ないとため息をついて諦める。
「あはは……まあ、みんな居たほうが楽しいしね、ね、八幡？」
「そうだな……」
ここで、ホントは戸塚と二人がよかった！なんて言い出せば、また何言われるか分かったものではないので黙っておく。
「じゃあ皆さん早速行きましょ～！」
何故か無理やり参加した一色が仕切りだし、それに呆れたようについていく。

はあ……。
俺は心の中で、もう一度ため息をついた。